桜をめぐる作家たち

――桜民俗史／成城学園の桜人・水上勉と大岡昇平

細川呉港（会員）

●小林秀雄が播いた桜菌

人によって早い遅いはあるが、桜の花を心から美しいと思うようになるのは、やはり還暦を過ぎてからだ。美しいと思うだけでなく、いとおしいとさえ感じる。それは満開に咲いた桜も間もなく散ってしまうことを知っているからである。そして同じように自分の命も、もうあまり長くないことを悟る。人生に黄昏の季節が来たことを初めて自覚するのだ。

この悟りを迎えることによって、人は、今まで囚われてきた俗世間の出世欲や、名誉欲、金銭欲などの邪心から解放される。桜によって目覚めさせられるのである。

仮にこれを「桜記念日」としよう。あるいは「桜花忌（おうかき）」と言ってもいい。今までの自分が一度死に、別の人間に生まれ変わるからである。

人間はこれを早く迎えるか、遅く気が付くかで、その後の人生が大いに違う。

文芸評論家の小林秀雄は死ぬ前の二十年間、狂ったように桜を見て歩いた。彼自身、ちょうど本居宣長を調べ始めたころである。本居宣長は調べれば調べるほど桜狂いであったことが分かる。遺言書に葬式のあげ方から墓の造り方まで書いた。墓には山桜の木を植えるよう図を描いて指示した。位牌の代わりに桜の木で作った笏をたて、戒名の代わりに「秋津彦美豆桜根大人（あきつひこみずさくらねのうし）」と書くように。そして死ぬ前に毎晩布団の中で、桜に思いを巡らせて歌を詠んだ。最初は百首つくる予定だったが、なかなか死なないので、次第に増えて、しまいには三百首におよんだ。

それから時を経て、百八十年後、小林秀雄も負けないように桜を見て歩い

太白

6た。しかも多くの作家たちを誘って一緒に歩いた。目的の桜の、花の見頃に合わなかったときは、次の年に再びトライした。桜は、見れば見るほど奥が深いことが分かる。水上勉も宇野千代も大岡昇平も、さらに里見弴から川端康成まで、画家は梅原龍三郎、中川一政、東山魁夷も、小林はみんなを桜の信者にした。水上に荘川桜を、宇野に薄墨桜を教えたのは小林である。

菩提樹の下で釈迦が悟りを開いたように、人は桜の樹の下で悟りを開くのであろう。

こうして「桜人（さくらびと）」はあちこちに「桜旅（さくらたび）」をしながら、まるで感染者を増やすみたいに「桜菌（さくらきん）」を撒き、また、多くの「桜人」を生んでいくのである。

●水上勉とふるさとの桜

作家、水上勉についてはすでにご存じの方も多いと思う。水上は福井県若狭湾の中の小浜湾に面する本郷という小さな町の、さらにそこから佐分利川を遡った野尻という山の中の部落の貧しい家に生まれた。野尻分校を卒業前に、水上は京都の相国寺の塔頭のひとつ瑞春院へ小僧に出される。そこのところを、水上は次のように書いている。

「九つの夏に京へ行く相談があり、十歳の冬、京都の禅寺にはいることになった。もうそれ以後は桜の故郷をはなれた。五年生の入学時にみた風景が最後となった。

二月十八日、大雪の日の出郷だったから春のこぬうちにでたのである。この日の記憶ははっきりしている。駅前の桜は雪をかぶって樹氷のように枯れ枝をのばして、降りしきる粉雪の中にあった。蓑をきて見送ってくれた母の姿が、その雪の中に、ぽつんと犬といっしょに小さく残っている。桜は母と仔犬を点のように抱いていた。尾内のさんまい桜も遠くにかすんで見えなかった」

彼の周りには、佐分利川の両岸や駅や小学校にも、そして「さんまい」と呼ばれる村の人たちの祖先が眠っている墓の丘にも、桜がたくさんあったというのである。

お寺の見習いというより、丁稚奉公は、まだ子どもだった水上にとってはとてもつらいことだったと、彼は後に具体的に書いている。ひもじい思いもしたらしい。ひもじい思いをしながら、寺の老住職夫婦の食事を傍らにいてずっと正座をして給仕をさせられた。自分には与えられないものばかりだったという。

一年と少しで彼はその寺を飛び出し、いろいろあって今度は衣笠山の天龍山別格等持院に行く。そこにはすでに六人の小僧がいて、水上は一番下っ端。その小僧たちからも手痛いいじめを受けたという。

その等持院で六年我慢したがついに脱走。昭和十一（一九三六）年のことである。そして下駄屋、染物屋などに奉公し、一時満洲の奉天にも行った。一度実家に帰り東京へ、そして京都伏見で入隊と、苦難の人生はまだまだ続くのである。

今回、高松祐一（元宇都宮中央女子高等学校長、桜校長として有名）からさまざまな話を聞くまで、私は水上勉と桜については、有名な桜翁、笹部新太郎をモデルに書いた小説『桜守』しか知らなかった。

しかし、水上は日本中のさまざまな桜について、自分の体験だけでなく各地の桜や、知人の人生を織り交ぜてエッセイ集『在所の桜』を書き、また桜だけでなく『わが草木記』という随筆集も残している。彼の桜に関する知識と、全国の桜を見て回った執念もまたすごいということがあらためて分かった。これは大した「桜人」である。桜を長年見ることによって彼は、人を見る目や、人生の悟りをさらに深めていくのである。

さて、水上勉は、昭和三十八（一九六三）年九月、東京の高級住宅街、「成城学園」に家を買った。水上がみずからの体験した京都のお寺、等持院を舞台にした小説『雁の寺』が第四十五回直木賞を受賞し、その二年後のことであった。駅からも近く、成城六丁目六の十二番地、百八十坪の広い敷地である。庭の真ん中には芝生があり周囲に木が茂っていた。その庭の南の端に、大きな一抱えもある桜の木が水上の来る前からあった。見たところ五十年はたっている。

しかしその桜は春になっても花が咲かない。

「桜なのに、本当に役に立たない木ですね」

と夫人が言った。

ところが引っ越してきてから八年目に、突然その桜は花を咲かせた。それもそこらにある通常の桜ではない。白い大きな花である。もともと成城の町には碁盤の目状の縦横の道に、たくさんのソメイヨシノが植えてあって、毎年、町を挙げて桜祭りをしている。祭りのときは個人の庭を開放してお茶会や出店もたくさん。周辺では有名な桜の町である。水上の庭で咲いた白い桜と周囲の桜との違いは一目瞭然であった。

この成城学園の桜並木は、大正末年に、新宿にあった成城学園という学校が引っ越してきたことに始まる。昭和二（一九二七）年に、小田急線が開通。成城学園前は、学園と、高級住宅街として小田急が街づくりを計画した。最初は、成城学園の生徒と、先生、それに父兄も手伝って、学園内の敷地に桜を植えた。その後、町全体にソメイヨシノとオオシマザクラが三百本ほど植えられている。今は行政が管理し、逐次植え替えも行われている。秋には明正小学校の生徒が落ち葉かきをやっている。

八年目にして初めて咲いた桜を見て、水上はさっそく桜守・佐野藤右衛門のつくった図鑑『さくら大観』を調べる。どうも日本で最も大きな白い花を咲かせる「太白（たいはく）」に似ている。専門家にも何人も見てもらった。確かに似ているが少し違うと言う人と、いやこれは太白と呼んでもおかしくない、と言う人もいた。

同じ成城に住む、大岡昇平が言うには、この屋敷の南側には、もと平塚らいちょうの屋敷があったから、この桜

は、平塚らいちょうが植えたのかもしれないと――。大岡は一度だけだが、学生時代にらいちょうの家に来たことがあるという。平塚らいちょうは『青鞜』という雑誌で、女性の解放と自立を説いた人である。水上は、そんなモダンな人が南隣に住んでいたのかと、わざわざ成城の古い地図を求めて調べた。しかし区割りが変わっていて境界線はどうもはっきりしない。それでも一時は、水上は夫人とともにその桜を「らいちょうざくら」と呼んだりした。

後に水上は大岡夫妻を連れて京都に行き、常照皇寺の桜を見た後、自分のもといた等持院に行き、廊下の隅で弁当を食べたが、大岡は寺にいるあいだ中、ほとんどものを言わなかったという。水上の小僧時代の話をよく知っていたからである。

「太白」は江戸時代から栽培されていたとされ、花は直径五センチもある白の大輪。若葉は、褐色を帯びた黄緑色が特徴。知る人ぞ知る名桜である。東京では、小金井公園の「桜の園」の西の端、また足立区の荒川土手の「都市農業公園」の東の入り口などにある。また静岡県三島の国立遺伝学研究所には「駒つなぎ」という名前で見たことがある。親鸞が馬をつないだところから名付けられた。桜は東と西とでそれぞれ歴史があり、同じ桜でも名前が違うものが多いのだ。最近では遺伝子による分析が進んでいて、三つも四つもの違う名前の桜が、遺伝子ではまったく同じものだということも分かってきた。

「太白」には有名な逸話がある。これは大阪の桜翁、笹部新太郎の書いた『桜男行状』という本にも、佐野藤右衛門の『桜守二代記』にも出ていたと思うのだが、太白が日本に絶えたという噂を聞いて、イギリスの桜収集家、コリングウッド・イングラムという貴族が、「自分のケント州の庭には、日本から持ち帰った「太白」があるから穂木を送り返そうか」と―、仁和寺のある御室の香山益彦に提案したという話だ。

イングラムはもともと世界を股にかけて鳥類の研究をしていたが、明治三十五年に日本に来てから、すっかり日本の桜の虜になり、何度か日本に来て、たくさんの品種の桜を持ち帰り、自分の邸宅の広い敷地の中に植えていた。そのイングラムが大正の末、再び日本に来て、太白が日本にはなくなったという話を聞き、自分の桜を提供しようと言ったのである。

日本の植物はそれまでにも、文政年間に来日したシーボルトが紫陽花を始め、椿、山茶花、桐、梅、百合、モミジ、フジなど四百種以上持ち帰り、母国で品種改良を重ねて、ヨーロッパに普及したことはよく知られている。そのころは、衣食住のすべての分野において、植物は重要な「資源」で、西洋先進国は競って南の未開地を探検し、植民地を求め、そこからまだ知られていない有用植物を採集し研究した。プラントハンターである。それは蘭などの鑑賞の花だけでなく、その後南米で見つけたパラゴムや、インドネシアではキニーネをつくるキナの木、またサトウキビ、胡椒、茶などを産業化し

た。人間の役に立つ植物を「発見」して母国に持ち帰り、大温室を造って栽培、品種改良をし、環境に適した地にプランテーションをつくった。これらは南の植民地の場合が多い。

またシーボルトが持ち帰った日本の植物のヨーロッパでの流行は、後のジャポニズムとも相通じるものもあった。椿は貴族間でもてはやされ、有名なオペラ「椿姫」を生み、またシャンソンではイベット・ジローが「あじさい娘」をリリースして大ヒットしたりした。ヨーロッパで開発された紫陽花の新種は、今や日本にも逆輸入されている。

「太白」が日本でなくなったとイングラムに言ったのは、荒川土手の桜並木をつくった船津静作である。これは二〇一六年に出版された『チェリー・イングラム―日本の桜を救ったイギリス人』（阿部菜穂子著　岩波書店）にそのときのことが書かれている。大正十五（一九二六）年イングラムが、船津家を訪問し『江北桜譜』を見せてもらい、その後、家宝ともいえる船津の曾祖父が描いた白い大きな花の「太白」の軸が出された。そのとき船津から「どうも日本では太白はなくなったようだ」と初めて聞いたのである。

それで、先祖から代々仁和寺に使えていた御室小松野町の香山益彦に「太白」を提供しようと提案したのだ。香山は『桜』とか『御室の桜』などの本も書いている桜研究家（京都府立高等学校教頭）。

香山は旧知の大阪の桜翁・笹部新太郎に聞きに行った。こういう提案があるのだけれど、どうしたものか――。

笹部はすぐに答えた。桜は日本の宝、本家本元である。それをイギリスからもらうなんて、とんでもない。日本の恥だ、とも言った。日本になくなったといっても本当になくなったのかどうか分かりゃあしない。古くから桜は日本中にある。それに日本は山国だ、どこの村や谷に隠れているか分からない。イングラムがないと言っても、彼が日本で桜を見て回ったところは知れている。大都市のそれも高級ホテルに泊まっていては分かるわけはない、とさえ言った。

しかし、せっかくの申し出、香山は京都の植木屋・佐野藤右衛門にも相談し、結局「太白」の穂木をもらうことにした。

ところがイギリスから届いた穂木はすでに枯れていた。翌年再び試みられた。今度は穂木を大根に差して送ってもらった。しかしこれも失敗だった。送られている間に芽が出たが、これも大根が腐り、枝も枯れていた。長い船旅に耐えられなかったのだ。そして三回目、今度は穂木をジャガイモに差して、シベリア経由の鉄道で送ってもらった。今までは、船で暑いスエズ運河を通ってインド洋経由で運ばれていたのだ。三回目でやっと穂木は生きたまま、京都の佐野藤右衛門の桜畑（さくらばた）に届いた。藤右衛門は、それをオオシマザクラに接ぎ、仁和寺や、やがて古くからある桜の名所、平野神社にも植えた。

水上は、いろいろ本を読んで、勢いのなくなった自宅の太白の「取り木」を思いついた。枝の途中の皮を剥いで

土をつけ、ビニールで覆い、夏中、水をやった。一年後、その枝の下の部分を伐って、土に戻すのである。根の生えた取り木は見事成功。何本かの小さな「太白」ができた。親木は背が高くて花は上の方で咲くが、取り木のほうは小さいので花が手元で見える。

あるとき、水上夫人が、いよいよ「うちの太白」が枯れるかもしれませんよと言う。聞くと、隣家の、くだんの平塚らいちょうが住んでいたと思われる南側の土地に鉄筋の大きな住宅が建つというのである。「太白」の幹のすぐ近くから土がブルドーザーで掘り返された。

翌年は、咲かないと思っていた「太白」だが、花は咲いた。しかしいつもより花数は少なく、また弱々しかった。いよいよだめかもしれない。もともと五十年以上たった古い木である。

水上は、引っ越してきてから咲かなかった桜が、八年目に咲き始めたことや、ひょっとしたら、平塚らいちょうが植えたものかもしれないという話を、エッセイ風に原稿に書いた。宇都宮中央女子高校の桜校長こと高松祐一の書いたものによると、「初出は雑誌『文芸春秋』に掲載された短編小説だった」とある。しかし、水上自身の書いたエッセイ集『わが草木記』によると、「毎日新聞の随筆欄に〝うちの太白〟という小文を載せた」とある。あるいは両方に書いたのかもしれないし、時期もずれているのだろう。〝うちの太白〟はかなり反響があった。

さて、桜校長・高松祐一は、『文芸春秋』の記事を見て大いに心を動かされた。いよいよ水上家の古い「太白」は枯れるかもしれない。水上は随筆の最後に、「自分は忙しいので、どなたか我が家の「太白」の枝を「取り木」にするなり、枝を持って帰って接木をするなりして、再生してくれる人はいませんか？」と書いたからである。

高松はすぐに、宇都宮から東京の成城に出かけた。「若かったから勢いで出かけた」と後に高松は述べている。面識のない水上勉の家にいきなり行くのも勇気がいったことだろう。そして枝をもらってきて自宅で接木をし、翌年、赴任先の宇都宮中央女子高校に植え直した。接木は無事根付いた。高松はその桜を「水上太白」と名付けたのである。

それからさらに五、六年後、宇都宮中央女子高校は創立五十周年を迎えた。「水上太白」は人間の背丈よりも大きくなり、花も毎年少しずつ咲くようになった。それまでにも高松は、何度か水上に手紙で、太白のお礼を言い、いただいた桜を「水上太白」と名

最晩年の桜校長・高松祐一と伐られる前の「水上太白」

付けたこと、またその成長ぶりについて報告していたが、最後に思い切って創立記念日に宇都宮の学校まで来て講演をしてくれないかと頼んだ。

水上も、桜を保存する主を探していると自ら原稿に書いたことだし、無事に「うちの太白」が育っていることを聞いて一度見てみたいと思った。水上は学校にやって来て、全校生徒の前で講演をし、またほかに市内二か所ほど増やした「水上桜」を見て回った。その上で高松は、水上に色紙を書いてもらった。昭和五十三（一九七八）年のことである。

色紙には「土くれの野に生きて花も實もあり」と書かれていた。謙虚な水上であるが、若狭の貧農に生まれた自分が、小学校を出ずに寺の小僧になり、艱難辛苦の末、やがて作家に。そうした自分と、またこれからの若い高校生たちに対して励ましの意味を込めて書いたのかもしれなかった。実際、水上は貧乏で、恵まれない子どもに、早くから本をたくさん読んでもらい、またいい絵を数多く見てもらうために、故郷の村（現在のおおい町）に茅葺の大きな家を移築し「若州一滴文庫」をつくり、多くの本を寄贈している。

桜校長こと高松の仕事はそれだけで終わらなかった。書いてもらった直筆の色紙を、そのまま石碑にして学校に残したいと水上に訴えた。水上は今まで自分の石碑など建てたことはないと断ったが、高松はぜひと言って食い下がりこれも実現した。いまでも校庭には水上の直筆の碑が残っている。水上としては初めての石碑となる。おそらく桜の好きな水上は、高松の植えた校庭の、百種、百五十本もの桜のあるこの学校に、自分の碑があってもおかしくないとも思ったのであろう。同校は昭和六十年に桜功労賞をもらい、美智子妃からお言葉をいただいた。

水上は、エッセイ集『在所の桜』で桜について二十二の小文を書いている。しかも桜を求めて全国各地に旅をしている。いかに水上が桜に執着していたかがあらためて分かる。

水上は、随所に「故郷の桜」について何度も書いている。佐分利川の両岸の桜、小学校（分教場）の桜、それから集落の祖先の眠るさんまいの丘の桜、そして旅立ちのときの駅の雪の桜。彼は、日本中桜を求めて歩くたびに、故郷の桜を思い出すのだ。しかしそれらの桜も、道路拡張とか、河川の土手の改修とかさまざまな理由を付けてどんどん伐られた。水上は、「村の桜」の中で、次のように言っている。

「むかしは京、大阪に奉公にでるのが貧しい農村の子らの道であった。親からはなれた子どもらは、自分自身で求めた次の親（主人）にしつけられて生きたものだが、つらい時は、六年生を卒えてでた四月の村の光景を瞼にえがいた。桜の花も、学校のものも、瞼を閉じさえすれば見られた。ぼくが日本人の望郷の思いの底のネガには、故郷の桜があるはずだといいつづけているのはこのせいである」

確かにそうかもしれない。日本人の心のふるさとは、故郷の桜につながる

のだ。水上はこうも言っている。「母親につれられて佐分利川の桜の土手を歩いて町に行った。大工だった父親からは山に入って木の話をしてもらった。町の桜を見れば母を思い出し、山の桜を見れば父を思い出す――」とも。

つい最近、私にきた手紙のことも話そう。「新しい故郷の桜」の話である。

若い頃しばらく付き合っていたある女性が、結婚して大阪の郊外の知らない町に行った。東京で育った彼女は、縁もゆかりもない土地でさびしいと手紙が来た。知らない町大阪の郊外で、彼女は子どもを産み、育て、その子どもも結婚して孫ができた。私は、東京の桜が懐かしいだろうと久しぶりに上野の桜の写真を送ってやった。するとすぐに、大坂郊外の近所の桜の写真を送ってきた。その写真は、私にとっては、知らない町の何の謂れもないただのソメイヨシノの桜並木に見えたが、彼女にとっては近所のとてもきれいな桜並木だと言う。私ははっとした。彼女は大阪郊外の町で新しい「故郷の桜」を見つけたのだ。結婚して所帯を持ち、子どもを育てた新しい心の故郷の桜である。

このようにして、日本人は新しい故郷を、桜とともにつくっていくのかと思った。

人は誰でも自分の故郷の桜を大切にする。たとえばハワイの古い日系人の思い浮かべる日本の桜もそうである。ハワイには日本のような桜は咲かないからだ。移民の親たちは、子どもたちに日本の桜がいかにきれいかを繰り返し教える。そして桜を見ないうちは日本人の気持ちは分からないとも。

桜校長・高松祐一も前述したように、道路拡張のため今は一本もないが、子どものころの宇都宮の軍道の桜並木を「心の桜」として生涯大切にしている。

かくいう私も瞼を閉じれば、すぐに故郷の桜を思い浮かべることができる（拙著『桜旅』「桜が美しいと思うようになったころ」に書いた）。

その故郷の水源地の桜も、古くなって危ないとか、木から虫が落ちてくる、枯葉で屋根の樋が詰まる、とか近所の水源地の下に住んでいるばあさんたちが訴えてすべて伐られた。あるいはそう言っていると土建屋が誘導したのかもしれない。明治三十五年に計画され、軍港と呉工廠のために、大正六年に完成した由緒ある水源地と、その中に植えられた歴史ある桜である。多くの人々の想い出の桜である。第二次大戦中には二度と帰ることのない呉港からの軍艦の船出を、丘の上から見送った桜である。多くの兵隊たちが、この世での見納めの桜だった。いろいろな手記の中にも出てくる。

生きている人も、死んでいる人も「心の桜」なのである。

そんなことを今のばあさんたちは知っているのであろうか。私に言わせれば、そのばあさんたちが水源地の下にお嫁に来る前から、桜はそこにあったのである。

宇都宮中央女子高校に水上勉の碑が建てられてから、四十四年。令和四（二〇二二）年同校は昭和三年からの

長い女子高の歴史に幕を閉じ、共学になった。そして校庭の東、「水上桜」は、他の数十本の桜とともに伐られた。高松が植えた最盛期には百種、百五十本あった桜である。野球のグランドの建設に伴い桜がすべて伐採されたのだ。校庭の端に植えられていた桜は、グランドを少し狭くするとか、何とか歴史ある桜を残す方法はなかったものであろうか。

桜なんか関係なく生きている人たちにとっては大したことではないのであろう。まして、先人が必死になって集めた珍しい桜の品種などどうでもいいのだ。何十年と手塩にかけた桜の伐られたあとを見届けてまもなく、高松祐一は亡くなった。86歳であった。

校舎が立て替えられるたびに、校庭の桜が切られることが多い。これも全国的な傾向である。お役所の役人は、建物だけ建てれば自分の役目は終わるからである。

水上は何度も強調している。戦後、日本中で桜のみならず樹木が大切にされていない。何か工事をすると古いかけがえのない歴史を持つ木をすぐに伐ってしまう。伐るのは簡単である。しかし歴史というのは、何も歴史の教科書に出るような歴史上の有名な人物とか文物でなくとも、名もない木でも、地域の人々にとっては、何十年も親しみ、共に生きてきた愛着のあるもの。たくさんの想い出や、喜びや悲しみを内包して人々の人生そのものと言ってもいい木も多い。場合によっては、歴史的文物よりも大切なものだ。

世の中には忘れられた、ほったらかしの銅像や記念碑はいっぱいある。それよりも名もなくても、人の想いを秘めた木はたくさんあるのだ。それをいとも簡単に伐る。失礼な言い方だが、責任は、無知、無能な行政の担当者と、金さえ儲かればいいという土建業者である。

行政の担当者はしょっちゅうころころ部署を替わる。物事を長い目で見ていないから、その場限りの場当たり仕事だ。建物を建てるために、またその建物を建てるため道路を付けるために木を伐る。何とか人間の知恵で伐らない方法はないものであろうか――。伐る前から準備して伐らない方法を考えるべきである。

日本の役人が地方の行政も含めて、戦後は完全に退化している。縦割り行政のせいで、何もできないせいもあろう。戦前の戦争の時代に、挙国一致でなんでもできる大政翼賛会への反発から、戦後は何もできないように分権化したのである。進駐軍のせいかもしれない。

今の行政の役人は、なんでも後ろ向きにしか考えないようになっている。

ある土建業者が言っていた。

「木を伐らないと台風が来て倒れるかもしれませんよ。そうすると怪我人が出るとあなたの責任になりますよ」

そういえばすぐに役人は「伐ってくれ」と言うのだと。責任逃れするのがお役所の「仕事」である。もちろん伐る提案をする土建業者は、伐られる木のことなど考えていない。

大きな木ほど、クレーン車などを使って、伐るのは大きな仕事になる。また伐った後、太い大きな木は、家具屋や木工細工の会社に売れば、かなり

の金になる。木目を生かしたテーブルや応接セットになる。いいお金になるのだ。伐ってお金になり、さらにその木を売ってお金になる。そんなことは、お役人は考えたこともないだろう。建物さえ建てれば、道路さえ作ればいいのだ。何かと言えば、土建屋が木を伐れと言うわけである。無知な役人を騙すのは簡単である。

水上勉はまた明治時代に伐られた桜の木の話を紹介している。それは吉野山の桜で、『桜史』を書いた山田孝雄（よしお）の本。山田は明治八年生まれ。賀茂真淵、本居宣長から続く、国学の継承者であり、また国文学者、歴史研究家でもある。

山田孝雄は『桜史』の中の「桜の災厄」という一文の中で、明治二十九年に吉野を訪れたときのことを書いている。

明治維新以来、文明開化とかで、なんでも西洋の物はいい、日本の物は古いとあらゆる「旧弊を打破」した。古いお寺の仏像や宝物までも火にかけ、また歴史ある建物も売りに出した。奈良の興福寺の五重の塔もタダ同然の値段で、競売に付されたのは有名な話だ。この時代多くの文物やお宝が海外に流出したのである。

そんなとき、山田孝雄は吉野山に行った。明治二十九年のことである。

すると天下に名だたる吉野山の桜の木が、みんな十年余りの若い木ばかりであった。不思議に思った山田はその理由を聞くと、「これ明治維新後かくのごとき不経済のものは伐りて有用の樹を植うるにしかずとて伐りたりしが故なり。古は蔵王権現の神木なりとて一枝をも忽（ゆるがせ）にせざりしが、文明開化の威力には抗すること能はざりしが為なり」と。

しかし、後になってそれは間違っていたとして、新しい木を吉野の山に再び植えだしたのだと言う。山田が見た細い桜の木は、そうした木だったのである

山田は言う。吉野山の桜でさえ伐ったのだから、まして日本中のその他の木は、どれほど伐られたことかと。

水上はそれに付け加えて、多くの街路樹、成城の桜並木も、幹の際まで舗装されていて、その木の下に伸びている根のことなぞ誰も考えていないという。桜のみならず、木は枝を張っているだけ、土の中に根が伸びているのだ。そうしたことさえ、行政の担当者は、まして土建業者も考えていないと。

明治維新の廃仏毀釈もそうだが、戦後の風潮も、戦前のものはすべて悪いと排斥したのである。桜も戦後長いこと疎外されてきた。奈良時代の昔から日本には桜を愛してきたたくさんの人々の歴史や、文学があるのに――である。大衆というものはそういうものかもしれない。何かのブームが起こると、必ずそれに乗って流行の定義（スローガン）「文明開化」とか「お国のために」とか、戦後は「民主主義」を金科玉条のごとくふりかざし、騒ぐ人間が出てくる。

世の中はそういったことの連続かもしれない。長い歴史を見通して世の中を見られない人があまりに多いのだ。